【日本の大学】第 12 回――広島大学：平和と自由を希求

広島大学（広大）は、1949（昭和 24）年に設立されたが、その前進となる学校は九つに上り、日本で最も多い前身校を持つ大学である。その淵源は、1875（明治 7）年に広島県が創設した白島学校にさかのぼる。翌年同校は、県公立師範学校と改称、その後も、名称を変えながら 1943 年（昭和 18）設立の広島師範学校につながった。このほか、1887（明治 20）年に広島高等女学校、1902（明治 35）年には全国で 2 校目となる中等教員養成機関として広島高等師範学校が創設された。さらに、広島高等工業学校（1920 年）、広島高等学校（1923 年）、広島文理科大学（1929 年）などが設立されて現在の広島大学の基礎となった。

広大の各学部のうち、広島高等師範学校（広島高師）が源流となっているのが教育学部であり、広島高師の大学昇格運動の課程で設置された広島文理科大学は、文学部、理学部、そして教育学部の一部につながっている。

広島高等工業学校は、広島工業専門学校（1944 年）と校名変更した後、現在の工学部の基礎となった。広島高等学校は、戦前最後の官立高等学校だったが、広大では、皆実分校（のちに教養部から総合科学部）となった。さらに広島女子高等師範学校は、教育学部福山分校の基礎となった。

このほか、広島師範学校⇒教育学部東雲分校と同三原分校。広島青年師範学校⇒教育学部福山分校と水畜産学部。広島市立工業専門学部⇒工学部の一部へ。広島医科大学⇒1953 年広大に併合され医学部へ、など、それぞれ広大各学部の基礎となっている。

苦難と曲折の末

こうした前身校から広島大学への統合までには多くの苦難と紆余曲折があった。特筆すべきなのは、1945（昭和 20）年の広島への原子爆弾投下である。8 月 6 日午前 8 時 15 分、人類初の原子爆弾が落とされ、多くの犠牲者を出し、市内全域が灰塵に帰した。広大の前身校の多くが、爆心地から 1～4ｋｍの範囲に点在しており、壊滅的な被害を受け、多くの学生・生徒や教職員が犠牲になった。

犠牲になったのは、日本人だけではなかった。当時、広島文理科大学、広島高等師範学校にはアジアからの留学生が在籍しており、中国、モンゴルからの留学生は、被爆時に 37 人以上おり、このうち 3 人の被爆死が確認されている。また、東南アジア各地からは、占領政策上の目的で各国の名家の子息から選抜・招致された「南方特別留学生」が在籍しており、彼らのうち現マレーシア出身の 2 人が被爆死している。

以下、広島大学のホームページなどから、戦後の歩んだ道や現状を紹介しよう。

戦後、広島では、原爆・平和問題に熱心に取り組むとともに、国立の総合大学を誘致しようとの動きが活発化した。戦前、日本では複数学部を持つ総合大学は七つの帝国大学だけだった。即ち、東京大学、京都大学、東北大学、九州大学、北海道大学、大阪大学、名古屋大学であり、広島にあったのは、単科大学の広島文理科大学だった。

県や市町村、商工会などが広島総合大学設立期成同盟会を結成し（1948 年）、設立を熱心に働きかけた。1949 年には、国立学校設置校が公布施行され、全国に 69 校の国立大学が誕生した。設立の経費は、３分の１は県費、残りの３分の 2 は寄付金で賄われた。

広島大学は 1949 年 7 月、多くの前身校を引き継ぐ形で、教育学部、文学部、政経学部、理学部、工学部、水畜産学部の 6 学部と 1 分校（皆実分校）でスタートした。同時に付属研究所として理論物理学研究所が、また、理学部に付属の臨界実験所が置かれた。

森戸文相招く

開校したものの、1 年近く学長が決まらず、不在のままだった。初代の学長にと白羽の矢が立ったのが、当時、文部大臣で広島県福山市出身の森戸辰男だった。森戸は学長に就任するため、衆議院議員を辞職したが、辞職するにあたって広島大学に行く理由として（１）郷土からの就任要望（２）日本の復興・再建は青年の向背にかかると確信（３）平和都市広島にふさわしい大学を――の 3 点を強調した。

1950（昭和 25）年 11 月の開学式で森戸学長は「変革期の大学」と題する講演を行った。その中で、のちに建学の精神となる「自由で平和な一つの大学」の原型を示した。平和な大学を目指して、平和関係図書と緑を復興させるため世界各国の大学に寄贈・寄付を求め、前者は平和文庫に、後者は大学の緑化につながっていった。

森戸学長は、約 13 年間、学長を務めたが、退任に当たって（１）平和建設のための科学研究者養成（２）民主的人間形成・人づくり（３）日本の不安・危機のなかでの国内指導者養成―――の必要性について述べて、大学を後にした。森戸はその後、中央教育審議会会長、日本育英会会長などを歴任した。

広島大学はこうした“森戸イズム”を継承し、基本的な理念として「自由で平和な一つの大学」を継承したほか、1995（平成 7）年には、理念 5 原則を制定した。即ち（１）平和を希求する精神（２）新たな知の創造（３）豊かな人間性を培う教養（４）地域社会・国際社会との共存（５）絶えざる自己変革――とし、この 5 原則の下で、国立大学としての使命を果たす、とうたった。

広大は、被爆地、平和への希求の強さなどもあって、ほかの大学と比べても大学紛争が激しかった。これに対し、大学当局は自主的、積極的に大学改革や統合移転を推進してきた。多くの前身校を包括して発足したため、広島市内だけでなく県内各地にキャンパスが分散しており、その整理・統合も大きな課題だった。一つ一つのキャンパスが狭いことも教育を進める上で障害となった。

そこで、適地の選定・調査に乗り出し、1972（昭和 47）年に可部、五日市、西条の 3 カ所に移転候補地を絞り込み、翌 73 年には西条地区（賀茂郡西条町）への統合・移転を決定した。県も、全面的に協力し、学園都市建設対策本部を発足させて、同地区の総合開発に乗り出した。新幹線の東広島駅の設置、上水道整備、バイパス整備、サイエンスパークの整備、工業団地の建設、ハイテク産業の誘致などを実施した。

東広島へ移転

東広島市は 1974（昭和 49）年の市制施行当時、約 6 万 4 千人だった人口は、直近では約 18 万 9 千人に達している。

1982（昭和 57）年には、まず、工学部が移転したが、その後、用地買収が難航し、上下水道などのインフラ整備など、問題解決に時間がかかり、実際に移転が完了するまでに 24 年もの歳月がかかった。

東広島キャンパス

現在、12 の学部がある。開校当時の文学部、教育学部、政経学部、理学部、工学部、水産学部、皆実分校のうち、政経学部は 1977 年に法学部と経済学部に分離、水産学部は 1979 年に生物生産学部に引き継がれ、分校は教養部（1964 年）から総合科学部（1974 年）へ、さらに医学部（1953 年）、歯学部（1965 年）、薬学部（2006 年）が加わり、2018 年には情報科学部が設立されている。

また、大学院は、人間社会科学研究科、先進理工系化学研究科、統合生命科学研究科、医系科学研究科の 4 研究科を募集しているほか、在学生向けとして、総合科学、文学、教育学、社会科学、理学、先端物質科学、工学、国際協力、法務、医歯薬保険学、生物圏科学の計 11 研究科を保有する。

学生数は学部生が 10678 名、大学院生 4513 名。教職員は 3555 名。外国人留学生は 63 か国（地域）から 1750 名が来ている。（2020 年 5 月現在）

広島大学 大学祭

広大は、2014 年に文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援の「タイプ A」の対象大学に選ばれた。これは、世界大学ランキングのトップ 100 を目指す力のある、世界レベルの教育研究を行うトップ大学として認定されたもので、対象の大学は、全国で 13 校だけ

である。10 年後に卓越した研究力、高い国際流動性、留学生割合などの項目で高い目標を設定して、それを実現しようというものだ。

現在の学長は、第 12 代の越智光夫氏。広大医学部医学科を卒業後、広島大学病院長や学長特命補佐などを経験し、2015（平成 27）年に就任、現在 2 期目である。

学位記綬与式に講演している越智学長

越智学長は、学長就任や再任の際、広大が進むべき方向性を考える視点として、三つの「L」と一つの「R」を掲げた。「L」は Legacy（遺産）、Locality（地域性）、Liberal arts（教養教育）であり、「R」は Research University であり、いずれも被爆地広島に開学し「平和を希求する精神」を掲げる広島大学の立脚点をさらに前進していくためのスローガンとして掲げたものだ。

広大を象徴する植物はフェニックスである。不死鳥の名を持つこの木は、米国ウエスレイアン大学からの寄付金を元に、原爆から復興する広島大学の象徴として、東千田キャンパスの正面前に植えられている。

日文：滝川　進

写真：広島大学 FaceBook から